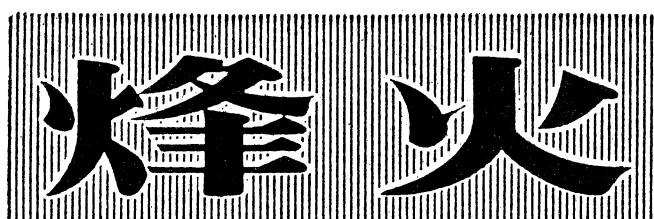


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争一世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1977年
12月15日
第313号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 (06) 371-3706
- 東京 新宿北郵便局 私書箱 2018号
- 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

三里塚

三月開港を阻止せよ



全国から決戦の地三里塚へ (10.9闘争)

全国の革命的労働者人民諸君！
日帝＝福田は十一月二五日「来春三月三〇日成田空港開港決定」を宣言した。そして、「三・三〇開港」にむけ、小泉よねさん煙強制収用、慣熟飛行、ジエット燃料貨車輸送などの一連の攻撃を暴力的に強行せんとしているのだ。労働者人民諸君！この挑戦をうけて立とうではないか。反対同盟農民とともに、そして勤労千葉地本をはじめとする全国のたたかう人民とともに、今秋期闘争の全成果をもつて壮大な決起を実現しなければならない。

今秋期闘争は、五・六三里塚、五・一八沖縄、八・九狹山とうちつづいた日帝の反革命非合法攻撃の大弾圧を、いかなる党と

プロレタリアートの武装によってうち破るのかを、先鋒な政治焦点としてたたかいぬかれた。われわれは、革命的プロレタリアートの主戦場＝全国政治闘争の組織化をもつて、全国の先進的労働者人民のただ中に、「中間連合政府への合流か、武装蜂起－プロ独の大道か」の路線的戦闘指針をもちこみ、「帝・社帝打倒／右翼日和見主義打倒／」の旗をかかげて、党（中央集権非合法党）建設の事業を前進させてきた。この路線上の、党建設上の確信なくして、反革命非合法攻撃との眞の対決はありえないことをあきらかにしてきたのである。日本帝国主義との最後の死闘の日々は、刻一刻と近づいている。そして日帝は危機の不可逆的

ジエット燃料貨車輸送阻止・奪阻止・大要塞を建設せよ！
慣熟飛行粉碎・小泉さん煙強

激化の沼地の中から、唯一の最後の延命の手段、外へむけてのアジア・朝鮮侵略反革命、内に対する中間連合政府攻撃―官僚的警察的独裁支配の強化に反革命的血路をきりひらかんとしているのである。

今秋期、日帝は第九回日韓閣僚会議をもつて、三月日米共同声明一八月福田ASEAN歴訪によつてしまつめられたアジア全域への侵略反革命の拡大、強化をおしすすめ、その不可欠の「足場」として南朝鮮新植民地主義支配の完成化をはかつた。それは、米帝との帝国主義間抗争の激化を背景とし、同時に米帝 \parallel カーラーの「新たなアジア戦略」とむすびついた、アジア・朝鮮侵略反革命の主導権を、その軍事上の侧面においても確立していく野望と一体である。P3C、FX15の導入が決定された。そして、アジア・朝鮮侵略反革命の出撃拠点たる沖縄においては、五月の沖縄基地確保法の実質化攻撃にひきづき、在沖米軍施設の米軍・自衛隊の共同使用、日本韓の実質上の合同演習の強行がおこなわれてきた。他方、日本階級闘争の拠点を形成してきた狹山闘争に対する、上告棄却、再審請求却下、石川氏の千葉刑務所への移監といふ許すまじき攻撃を一挙に全面化し、また三里塚闘争に対する、五・六攻撃をひきついでアクセス・ジェット、銃子上空飛行問題などを強行「解決」し、「開港まじか」なる反革命キャンペーンを流布してきたのである。アジア・朝鮮侵略反革命のもとに労働者人民を屈服させるべくうちおろされた日帝の暴力支配、独裁支配は、最後の平和幻想たる中間連合政府への労働者人民のひきこみを政治的に意図するものであった。

帝国主義間強盗的抗争に

(一)

今冬、帝国主義間の強盗的抗争は、急速な「円高ードル安基調」の形成を焦点にして一気に熾烈さをましている。「日本の円は不当に安い」(ブルメンソール米財務長官発言)を引き金にしてはじまつた「円高ードル安」は、十月十四日、四年三ヶ月ぶりに円の新高値を更新して以降、十一月末には一ドル \parallel 四〇円という記録的な高値にいきついた。そして、すでに事態は、十一月十八日から二日にわたり開催された日米通商協議を施回点にして、日米帝間の「経済戦争」ともいふべき局面に突入したのである。

現下の帝国主義間強盗的抗争、経済危機の激成の特徴は、抗争の戦場が帝国主義国間相方の国内市場をひとつのがんにしていることであり、「変動相場制」がその調整機能を完全に喪失し、いよいよ破局的な局面へとつきすんでいることである。日帝の七七年度貿易収支黒字は百七〇億ドルにのぼると予想さ

れ、他方、米帝の貿易収支赤字は三百億ドルにのぼると予想されている。米帝、西独帝とならぶ「三強」の一角の位置を確立せんとする日帝の急速な伸長が、米帝・西欧諸帝国内市場への輸出の急速な増大によつていることは周知の事実である。それゆえ、現下の強盗的抗争は、日帝と米・西欧諸帝の引くにひけない対立といふ様相を深めているのである。日米通商協議の席上、米帝リバースは日帝に対する米政府の危機感を理解していない。日本は保護貿易措置をとりながら自由貿易の恩恵にのみ浴そうとしている」とあからさまな不信を表明し、かつてない強硬な態度で、①日本の経常収支の赤字への転化 ②輸入制限品目の撤廃 ③製品輸入の拡大を軸にした五百品目にのぼる関税引き下げ要求をつきつけた。日帝に対するこれらの要求において、五〇億ドルにのぼる対日赤字をかかる西欧諸

主義者は、人民の自然発生性の「左」の要素に同化することで、党的指導力、牽引力を喪失してしまっている。彼らは中間連合政府攻撃の前にまったく無力である。

われわれは、かかる社帝、右翼日和見主義、急進民主主義との党派闘争を堅持し、侵略反革命阻止全国政治共闘に結集するすべての諸君とともに今秋期をたたかいねいた。同時に、この中間連合政府の戸口の時代における革命党にとっては社共、右翼日和見主義の影響から労働者人民を解き放つという任務、すなわち組織戦の組織化が決定的に重大であるといふ立場に立脚して、「党による革命的プロレタリアートの建設」をめぐる原則的論争を組織してきた。レーニン主義前衛党論、革命的政治闘争論、労農同盟論などを論争上の焦点とし、われわれはひきつづき責任ある党派の共闘機関としての侵反共闘の発展を自己の任務としつづけるであろう。

全國の労働者人民諸君！
われわれが握りしめた秋期政治闘争の一切の戦果を、さらに発展させよ。十二月から七八年初頭にかけた最大の攻防の戦場、三里塚闘争にたて。ただひたすら、プロレタリアート人民の解放の大道、武装蜂起とプロレタリアートの道をつきすめ。中間連合政府への幻惑をたちきり、労働者、学生、農漁民、勤労人民の中から、革新的プロレタリアートの鋼鉄の戦士を建設せよ。

われわれが握りしめた秋期政治闘争の一切の戦果を、さらに発展させよ。十二月から七八年初頭にかけた最大の攻防の戦場、三里塚闘争にたて。ただひたすら、プロレタリアート人民の解放の大道、武装蜂起とプロレタリアートの道をつきすめ。中間連合政府への幻惑をたちきり、労働者、学生、農漁民、勤労人民の中から、革新的プロレタリアートの鋼鉄の戦士を建設せよ。

第一に、社帝との同盟の強化について。日帝、仏帝など先進帝国主義は、「資本主義の救済と改良」の総路線をかかげた先進国社帝潮流をとりこみ、強力な支配の同盟者へと育成した。「NATO支持・核武装必要論」をとなえた仏共産党、「危機にあえぐ日本経済戦争」の遂行、これである。そして、これが今日の帝国主義支配の世界的同時性・同質性を形成しているのである。

第一に、社帝との同盟の強化について。日帝、仏帝など先進帝国主義は、「資本主義の救済と改良」の総路線をかかげた先進国社帝潮流をとりこみ、強力な支配の同盟者へと育成した。「NATO支持・核武装必要論」をとなえた仏共産党、「危機にあえぐ日本経済戦争」の遂行、これである。そして、これが今日の帝国主義支配の世界的同時性・同質性を形成しているのである。

第二に侵略反革命の強化である。米帝カーラーの基本戦略は、対ソ包围網の維持をかけ声に西欧帝との経済的軍事的同盟の強化と並んでアジア太平洋圏においては日帝との同盟の強化として展開されている。それは日米協力と米中関係「正常化」をアジア戦略の柱として韓国を拠点にソシ帝との対峙を強化し、アジア太平洋圏、インド洋にいたる米帝の勢

帝は完全に米帝と足並みをそろえている。かかる中で日米通商協議は「完全に一致した条項は何もなかつた」(米帝)と何らの「成果」もあげずになつた。各国帝国主義のかかげる「自由貿易体制の護持」とは、実際には進行する保護貿易主義のとりつくろいであり、他の補完物になりさがつた。また急進民主主義者は、人民の自然発生性の「左」の要素に同化することで、党的指導力、牽引力を喪失してしまっている。彼らは中間連合政府攻撃の前にまったく無力である。

各國帝は、慢性的な不況下の失業、物価騰貴などの増大の中で、一層の強盗的抗争にかかりたれざるをえない。ブルジョアジーの「公式発表」ですら、米帝で八% (黒人十代では四〇%)、西欧諸帝で六% (十五~二十五歳では五〇%) にのぼる失業率が記録されており、労働者人民の憤激は、経済危機を恒常的な政府危機へと転化せしめている。

戦後マルタル・シユネープ体制崩壊以降の「戦争と革命の時代」をいろどる帝国主義間の強盗的抗争はいよいよ激化し、不可逆的である。それは帝国主義をしてその基本的延命方向へと駆りたてている。それは、民族解放・社会主義勢力を先頭にした全世界の革命的プロレタリアートの革命闘争の破壊・変質であり、そのための社帝との同盟と侵略反革命(戦争)の遂行、これである。そして、これが今日の帝国主義支配の世界的同時性・同質性を形成しているのである。

第一に、社帝との同盟の強化について。日帝、仏帝など先進帝国主義は、「資本主義の救済と改良」の総路線をかかげた先進国社帝潮流をとりこみ、強力な支配の同盟者へと育成した。「NATO支持・核武装必要論」をとなえた仏共産党、「危機にあえぐ日本経済戦争」の遂行、これである。そして、これが今日の帝国主義支配の世界的同時性・同質性を形成しているのである。

第一に、社帝との同盟の強化について。日帝、仏帝など先進帝国主義は、「資本主義の救済と改良」の総路線をかかげた先進国社帝潮流をとりこみ、強力な支配の同盟者へと育成した。「NATO支持・核武装必要論」をとなえた仏共産党、「危機にあえぐ日本経済戦争」の遂行、これである。そして、これが今日の帝国主義支配の世界的同時性・同質性を形成しているのである。

力圈と権益を維持せんとするものである。そして、この下で侵略反革命同盟の質的強化が方向づけられている。本年三一四月に行なわれた「チームスピリット作戦」（第七艦隊と在沖海兵隊を主力とし、在韓米軍、韓国三軍、在日米軍、そして自衛隊の事実上の参加をもつて行なわれた米日韓の陸海空総合演習）は、米軍の再編合理化とその上にたつた有事即応体制一攻撃的性格の強化として進行する米日韓反革命体制の強化方向を鮮明にしている。

日帝はこの米帝のアジア戦略と結合しながら、独自の利害をかけて日帝一朴体制を強化し、アジア侵略反革命の強化に突き進んでいる。日帝は今春の日米首脳会談以降、いよいよ日米帝の朝鮮侵略反革命の中での位置を決定的に増大させていく。その下で、第一に、日帝は米帝・ソ・社帝と共に「クロス承認」策動を推進することで朝鮮南北分断状況を固定化し、南朝鮮新植民地主義支配の完成化攻撃をうちおろしてい。今日、日帝は朴を指揮し、韓国第四次五ヶ年計画・KIDC構想を推進し、日帝一朴体制のうち固めのもとに、朴の言う「自主国防」・軍需産業育成という戦争準備をおし進めてい。第二に、日帝は、8月福田ASEAN歴訪をもつて本格化したアジア全域への侵略反革命の強化を進めている。

日帝一福田は、今日の「貿易戦争」に対処するべく行つた内閣改造の中で、「危機を突破する基本方向は東南アジアドクトリンである」と宣言した。それこそ、日帝が韓国一東南アジアを帝国主義間強盗的抗争に勝ち抜くための市場として確立し、その前に立ちふさがる民族解放・社会主義勢力との対峙の最前线を担わんとする表明に他ならない。

日帝はこのために、P3C導入、FX機選定をうちだし、さらに、公海上に位置する「日韓大陸だな共同開発区域の施設」に対する武力攻撃に対しては自衛隊を出動させると、自衛隊の海外派兵一侵略反革命戦争遂行の野

力をさらに一步おし進めた。

かかる、社帝を巻きこんで朝鮮半島を焦点として進行する侵略反革命に対し、南朝鮮人の反独裁民主化闘争は、南北統一を射程に入れ、「維新憲法撤廃」「緊急措置9号撤廃」を軸に不屈に闘いぬかれている。とりわけ、ソウル大の二千名の学生が機動隊の催涙弾に對し、投石・肉弾戦で闘い抜いた。十一・十二延世大三千名の大決起、そして幾多の大學生革命」の伝統を受けつぐことを宣言し、きつぱりと南北統一の闘いが朴独裁政權の打倒と日本プロ人民の決起を必要としていることを明らかにして。今日の「戦争と革命の時代」において民族解放闘争は帝・社帝と闘わねば自らの勝利をつかみとることができない。朝鮮プロレタリアートは、諸階級層人民をひきいて必ずや、この勝利のカギをつかみ、民族解放・社会主義の勝利の道をわが手とするであろう。そして、この朝鮮半島を焦点とした国際的な革命と反革命の激突は、いよいよ国際階級闘争の重心が帝国主義心臓部へ移行しつつあること、帝・社帝の打倒をかげた革命的プロによる武装蜂起の実現が火急の任務となつていることを鮮明にしているのである。

この帝国主義支配の世界的同時性、同質性をもつた攻撃の激化は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制を崩壊に導いた主体的勢力たる民族解放・社会主義勢力をはじめとする革命的プロレタリアート人民が次の一步をふみ出すべきことを要求している。次の前進の一歩一革命的プロレタリアートの国際主義的団結の促進は、レーニン第三インターの継承をめぐる国際党派闘争を路線の根幹にすえた、帝・社帝との全面戦争を組織し、蜂起プロ独を担うわが帝国主義心臓部の中央集権非合法党建設の前進を不可欠として実現されるのである。

中間連合政府の時代は 武装蜂起の前夜の時代である

日本帝国主義の未曾有の経済的危機——「日米経済戦争」、円高不況、輸出産業の不振、公称史上二番目の失業率——は、諸階級層の直接的な経済的利害対立を激成させつづある。支配者階級がもはやこれまでどうりのやり方で人民を支配できなくなる時代の到来とともに、人民の憤激は高まり、小ブルジョア的小市民的中間層の巨大な動搖がはじまつた。そしてそれは、ブルジョア政治の舞台における政党乱立・分裂・再編にはねかえつて、五年体制の崩壊下で、日本社民を代表する社会党内の抗争、いがみあい、分裂にそれはもっとも顕著である。江田離党、社市連結成

口仕合いで「日本の民主的再生をめざす革新潮流の形成」なるかけ声とともにより深く足をふみ入れて。これら連合政府構想をめぐる離合・集散・反目と連合の表層の背後に

革命的プロレタリアートは何を見なければならぬのか。経済危機はたしかに政府危機を増大させて。反政府的氣分は昂揚しつつある。そして、次の点が肝心なのだが、自民党単独政府の危機を、これら諸政党は同じブルジョア独裁支配の別表現である「連合政府」におきかえることによつて人民の決起を鎮静せんと努めているのである。事態の進行は複雑な様相をとりつつも、彼らのすべてが抗争と対立をくりかえしつつ、共通の反革命ストーガンのもとに実質上結束し、純化してゆくことに帰結する。日本資本主義の救済と改良、日本帝国主義主要路線の承認がそれであり、帝国主義の危機の時代における「祖国擁護」のスローガンがそれである。帝国主義はこれらの動向をひきよせ、とりこみ、育成することをもつて、危機回避の最後の手段として、中間連合政府の幻想のもとに、人民の巨大な不満・反抗・決起を封殺せんとするのである。そしてそれは、ブルジョア独裁支配の貫徹を保障する国家暴力装置の強化・肥大化による警察的官僚的独裁支配の強化とファシズム的勢力の糾合の攻撃とまったく結びついているのである。

今秋、「日航ハイジャック事件」を契機にして全面化した事態の中にそれはあきらかである。首相II・福田、法相II・瀬戸山を先頭にして敵権力は「過激派キャンペーン」を大宣伝するとともに、「ハイジャック防止法改正」の国会通過をまずはかつた。つづいて、「過激派事件」の裁判では弁護人不在のままでも審理をすすめることができるものとするという新法制定をもくろんだ。他方、「ハイジャック対策」を名目に、警察官の海外派遣・警察・自衛隊内の特別武装部隊の設置案を提出し、この第一弾として三〇人規模といわれる「日本赤軍派対策の専従班設置」を異例のスピードで強行したのである。これに、「人命尊重・国際威信・治安対策」の名のもとに社帝II・日共を尖兵としてすべての小ブル議会内諸政党は、こそつて賛成票を投じたのである。帝国主義は国民の排外主義的統合を策し、ブルジョア共和制諸機構から自立・独立した暴力装置の強化をすすめ、革命的左翼、革命的プロレタリアートの分断と孤立をもっぱら意図したのである。

プロレタリアートの武装蜂起の到来を恐れ、帝国主義ブルジョアジーは、今日の時代から自己をファシズムとして組織する準備を着々とすすめている。ファシズム的勢力を一つの社会勢力として育成することは今日の日帝の

生命線たるべき位置をしめている。この統合の頂点に立つものこそ、天皇制天皇制イデオロギーにほかならない。さしあたりそれは、今日の帝国主義の人民統治形態の制限範囲内で「象徴天皇制」の名称が与えられているのであるが、戦前・戦後をつらぬく日帝の暴力支配の支柱たる性格に何ら変化はないのである。「象徴天皇制」の帝国主義的国事行為への登場は急速に進んでいる。これを頂点とした反革命勢力の独自的社会的結集もまた大規模かつ急激である。本年十二月十一日、生長の家を出身母体とする自民党国會議員、玉置和郎を会長に、民社党春日一幸らをふくむ三十数名の天皇主義者国會議員を中心として「宗教政治研究会」が発足した。これと対して結成された「宗教政治協議会」なる団体は、仏教、禪宗、神道、新興諸宗教にまたがる百三〇組織をもって発足したといわれている。立正正会、靈友会教団、曹洞宗、生長の家など名をあげるまでもなく、信者数千万を擁すこの団体が登場した反革命的意義は明らかである。それは、元号法制定、日の丸・君が代制定、ヤスクニ法立法などに巨大なエネルギーを投入するであろう。そして、これにとどまらず、中間連合政府の破産の時を見こして、天皇制を頂点とする、帝国主義によつて組織される独自の反革命社会勢力の先頭に立つであろう。

中間連合政府の開始の時代が、武装蜂起の前夜の時代であることをわれわれは、はつきりとふまえておかねばならない。中間連合政府そのものは、色あいを変え、目新しく装つたブルジョア独裁国家の一形態たるブルジョア共和制の変種以外の何ものでもない。そこでは改良の速度以上に、経済的政治的な資本主義の擁護が増大する。だから、中間連合政府の現実上の成立は、その幻惑の破産の一挙的開始となるだろう。人民は一挙的に幻惑から目ざめ、二度と自ら中間連合政府によって自己の利益が実現されるなどと信じないだろ

ジエット・執行・慣熟阻止で 開港阻止決戦の勝利きりひらけ

う。しかし、そのような中間連合政府の時はブルジョアジーの破産の時である。ブルジョアジーは、もはやいかなる形態をもつての共和国でも人民を支配しつづけることはできない。人民の自然発生性は一挙的に蜂起一プロタリアートの武装蜂起とプロ独のたたかいで準備が勝利になされていなければならぬ。そのような中間連合政府の破産の時を予想して、ブルジョアジーはファシズムをもつて人民を支配する準備を一方では、なしてゐる。これにうちかつこと。中間連合政府の開始の時代から、プロレタリアート人民を武装蜂起とプロレタリアート人民を武装蜂起すること。これらを任務とする時、社共、右翼日和見主義との党派闘争は決定的に重大なものとなる。なぜならば、彼らこそ中間連合政府の害毒をとりわけ現実の労働者に、そして農民・学生の中へまきちらす張本人であるからである。

社共・右翼日和見主義の政治的影響から労働者人民をとちはなち、奪取し、革命的プロレタリアートへと組織しつづけるたたかいは、党の第一級の今日的課題である。とりわけ工場へ、そして農村・学園・地域へわれわれは「中間連合政府の道か、蜂起一プロ独の大道か」のスローガンをもつて出撃しなければならない。今日、労働運動の戦場において、総評五五回大会―「連合の時代」路線に示される、社共を尖兵とした中間連合政府路線のもちこみが本格化している。総評民同は、七八春闘の基調を「生活改善、雇用安定、実質賃金維持」としてうちだした。これらが、連合政権の樹立によって実現されるというのが、五五回大会富塚・横枝路線の基調なのである。この悪らつな労働者への幻惑の攻撃を許してはならない。いまこそ、労働者人民は、社共、右翼日和見主義との路線闘争と組織戦を大胆に創出しなければならないのである。

①開港発表後、直ちに、国鉄当局のジエット燃料輸送計画が提示された。成田線転覆事故以来、三里塚闘争と固く結合し、闘いを築きあげてきた千葉労働力を中軸とし、十二月三日以来強力順法闘争が推し進められている。日帝・国家権力は、法相瀬戸山をして、「刑事罰をも辞さず処分すべきだ」と言わせしめ、これに合流する社会排外主義者どもを従えて、何がなんでも、闘いをたたきつぶし、ジエット燃料輸送を、暴力的に強行せんとしている。

②小泉よねさん畑――現在は養子の小泉英政、美代夫婦が耕作している――は、空港ターミナルビルすぐそばにあり、同盟唯一の第一期工区敷地内の土地であり、この約十アールの畑が、空港へ通じる大動脈・東関東自動車道の上り車線を完全にふさいでいる。十一月二六日、公団は、五・六鉄塔破壊の憎むべき反革命非合法攻撃と同じやり口で、小泉よねさん畑地明け渡しに関する仮処分申請を、秘密裡に千葉地裁に提出した十一月二八日の千葉地裁に対する同盟弁護団・小泉夫婦の上申書提出、更に強奪策動粉碎の泊りこみ闘争宣言によって、十一月二九日この野望は暴き出され、二月十七日千葉地裁における審理を開く決定を引きだし、一旦は破算に追いこんだ。だが事態は切迫している。反対同盟は、強制収用に備え、警戒体制を解除するなど決定した。

今や、中間連合政府か、へ武装蜂起一プロ独・かの決定的局面に突入した日本階級闘争は、一切の闘争の場において、瞬時の予断も許さぬ、帝・社帝・右翼日和見主義との死闘の連続としてある。

全国の同志諸君！今冬一来春における攻防に傾注せよ！まさにこの数ヶ月間は、日本階級闘争の命運を決する激動の時である。

十一月二十五日、運輸相田村は、来春三月三〇日成田開港（閣議決定報告）を宣言した。

今春五・六鉄塔破壊反革命非合法攻撃以降、強権的に進められてきた開港攻撃をめぐる情勢は、一挙に決戦的段階に突入した。

日帝一ブルジョワジーは、國家権力との非妥協的闘争、社会排外主義との訣別を切り拓いた、三里塚闘争を中心としたこの全人民的高揚を、年度内開港攻撃によって破壊し去ることを至上の任務としている。

この全人民的高揚を、日帝の官僚的警察的独裁支配一中間連合政府攻撃の下に、打ち倒せねばならない。そのためにこそ党とプロレタリアートの武装蜂起とプロ独のたたかいと準備が勝利になされていなければならない。そのような中間連合政府の破産の時を予想して、ブルジョアジーはファシズムをもつて人民を支配する準備を一方では、なしてゐる。これにうちかつこと。中間連合政府の開始の時代から、プロレタリアート人民を武装蜂起とプロレタリアート人民を武装蜂起すること。これらを任務とする時、社共、右翼日和見主義との党派闘争は決定的に重大なものとなる。なぜならば、彼らこそ中間連合政府の害毒をとりわけ現実の労働者に、そして農民・学生の中へまきちらす張本人であるからである。

社共・右翼日和見主義の政治的影響から労働者人民をとちはなち、奪取し、革命的プロレタリアートへと組織しつづけるたたかいは、党の第一級の今日的課題である。とりわけ工場へ、そして農村・学園・地域へわれわれは「中間連合政府の道か、蜂起一プロ独の大道か」のスローガンをもつて出撃しなければならない。今日、労働運動の戦場において、総評五五回大会―「連合の時代」路線に示される、社共を尖兵とした中間連合政府路線のもちこみが本格化している。総評民同は、七八春闘の基調を「生活改善、雇用安定、実質賃金維持」としてうちだした。これらが、連合政権の樹立によって実現されるというのが、五五回大会富塚・横枝路線の基調なのである。この悪らつな労働者への幻惑の攻撃を許してはならない。いまこそ、労働者人民は、社共、右翼日和見主義との路線闘争と組織戦を大胆に創出しなければならないのである。

①開港発表後、直ちに、国鉄当局のジエット燃料輸送計画が提示された。成田線転覆事故以来、三里塚闘争と固く結合し、闘いを築きあげてきた千葉労働力を中軸とし、十二月三日以来強力順法闘争が推し進められている。日帝・国家権力は、法相瀬戸山をして、「刑事罰をも辞さず処分すべきだ」と言わせしめ、これに合流する社会排外主義者どもを従えて、何がなんでも、闘いをたたきつぶし、ジエット燃料輸送を、暴力的に強行せんとしている。

②小泉よねさん畑――現在は養子の小泉英政、美代夫婦が耕作している――は、空港ターミナルビルすぐそばにあり、同盟唯一の第一期工区敷地内の土地であり、この約十アールの畑が、空港へ通じる大動脈・東関東自動車道の上り車線を完全にふさいでいる。十一月二六日、公団は、五・六鉄塔破壊の憎むべき反革命非合法攻撃と同じやり口で、小泉よねさん畑地明け渡しに関する仮処分申請を、秘密裡に千葉地裁に提出した十一月二八日の千葉地裁に対する同盟弁護団・小泉夫婦の上申書提出、更に強奪策動粉碎の泊りこみ闘争宣言によって、十一月二九日この野望は暴き出され、二月十七日千葉地裁における審理を開く決定を引きだし、一旦は破算に追いこんだ。だが事態は切迫している。反対同盟は、強制収用に備え、警戒体制を解除するなど決定した。

③八・七・十のテスト飛行の再テストを突破口に強行されんとする慣熟飛行は、開港への既成事実を強権的に積み重ねんとするものである。アクセス・燃料輸送・航路・騒音公害・その他累積する諸問題の暴力的決着にも難行しながら、何がなんでも、これを強行せんとするのは、まさにその野望が、反対同盟の組織破壊攻撃にあるからに他ならない。

この三つの攻防を中軸として、現在担い抜かれている闘争を、開港阻止決戦の大爆発へと結合せよ！開港阻止決戦の大爆発を、日本プロ人民の解放の中心方向たるへ武装蜂起一プロ独の勝利と結合せよ！これに恐怖し、破壊せんとする帝・社帝・右翼日和見主義を

獄中同志早期奪還・三里塚三月開港阻止 中央集権非合法党建設の前進にむけ

年末始 党へのカンパを訴える

だがしかし、凡百の右翼日和見主義者と異なり、われわれは、その中で次のことをはつきりと見ぬいて闘つていかなければなりません。すなわち、七七年日本階級闘争が、明確に密集した反革命の壁を打ちくずしつつ社会帝国主義・右翼日和見主義の影響をふり払い、共産主義運動へと発展していくことに対して、これらの攻撃が合法一「非合法」手段を駆使しつつ打ちお

打ち倒せ！今冬一来春闘争は、中間連合政府か、へ蜂起一プロ独かをめぐる、日本階級闘争の貴重なる経験を刻印するだろ。そして全国の先進的プロ人民諸君、三里塚の先進的農民と共に、この壯絶なる経験を、我々は戦取しなければならないのだ。

本年に入つて、反革命非合法攻撃を頂点にして打ちおろされた、日帝の官僚的警察的独裁支配－中間連合政府攻撃は、日帝の朝鮮侵略反革命の新たな段階を物語ると共に、先進帝国主義心臓部における、へ武装蜂起の前夜の時代ゝが、ますます煮つまつてゐることを示すものに他ならない。

かかる時代への突入の中で、三里塚闇港阻止決戦は、どのように切り拓かれねばならないのか！

五・六反革命非合法攻撃こそ、「政府打倒をかかげた反政府闘争」の地平に対する、日帝－国家権力の基本的解答であり、従来の自然成長的闘争、自然成長的団結によつては、この闘いの持続・発展すら切り拓き得ない局面を明らかにするものである。

五・六以降半年余、三里塚闘争は、五・八

の課題に直面してきた。同時に、田帝の開港攻撃、関連事業（土地利用規制法・成田用水等）との直接対峙、これに合流する条件派への屈服分子との闘争の中で。そして、八・二九、十一・二〇のジェット燃料貨車輸送阻止闘争を通した組織労働者との結合の中で。これら日帝の開港攻撃との対決とその成果を、日帝の朝鮮侵略反革命を内戦に転化するへ武装蜂起→プロ独立の大道の下に、収斂させ得るのか否か。ますます煮つまるへ革命と戦争の時代へを、先進帝国主義心臓部において、勝利的に切り拓く一步をかけて、戦後階級闘争史上最大の農民闘争の歴史的総括を自らのものとする、革命的プロへの前進の課題が、三里塚先進的農民の実際上の任務に登っているのである。

五・六反撃闘争を体制内抗議闘争に引き入れんとした右翼日和見主義・急進民主主義者どもは、今冬一来春における、三里塚開港阻止決戦のかかる歴史的任務からプロ人民の目をそらさせ、帝国主義の政策結果に対する反対闘争に、おしとどめんとしている。その行きつく先是、一方は、中間連合政府への合流であり、他方は、その補完であり、共に、日

り、朝鮮侵略反革命の攻撃への敗北である。全国の同志諸君！ 本年の激動期に引き続く今冬一来春闘争こそ、三里塚闘争に端的に煮つまる歴史的課題が、全ゆる階級闘争の戦場で、日本プロ人民の明日の勝利を決する任務として担われねばならない時期である。

五・一五～一八沖縄公用地法延長～地籍明確化法攻撃以降、更に激化する沖縄侵略反革命前線基地強化の攻撃に、反抗と憤激を高める沖縄階級闘争の戦場において！

八・九「狹山」上告棄却攻撃以後、更に激化する日帝の部落差別攻撃、雪崩打つ排外主義～融和主義の抬頭に、不屈の闘いを進めんとする部落解放闘争の戦場において！

そして何よりも、先進的プロレタリア人民諸君！ 日本プロ人民の国際主義的歴史的任務を、その解放をかけて、今冬一来春闘争の勝利を先頭で切り拓け！ 日帝の官僚的警察的独裁支配～中間連合政府攻撃を打ち碎き、日本革命運動の前進を戦取せよ！ 我が中央集権合法党建設の下に結集し、ヘ武装蜂起～プロレタリア独裁～の大道を組織せよ！

党派闘争の勝利的地位のうえに、日本共産主義運動の最高の到達点－中央集権非合法党建設の総路線をうちたてたわれわれに対して、敵日帝国家権力は、階級的憎悪をこめて、加納一派完全打倒闘争三戦士に、懲役十年・求刑攻撃をうちおろしました。これに対する闘争宣言として幕をあけたわれわれと敵との攻防は、もとより三里塚における五・六攻撃・沖縄における五・一八攻撃・狹山闘争における八・九攻撃などの一連の敵の朝鮮侵略反革命にむけた、官僚的警察的独裁支配を軸にした全社会的な中間連合政府攻撃とその闘いと全く軌を一にするものです。

わが中央集権非合法党建設の決定的重要性を全労働者人民の第一級の緊要の課題としてつきたとしています。実際諸階級層の決起が、一国主義的視点ではなく、國際主義の精神でもつて領導されるべきことが今ほど強調されねばならない時はなく、またそれを目的意識的に指導しぬきその細流を武装蜂起一プロ独へ領導すべき党建設が闘う労働者人民にとって今ほど強調されねばならない時はありません。そうであるからこそこの任務に真向から応えんとするわが党建設の前進と、労働者階級人民との結合に対し、帝・社帝・右翼日和見主義の十字砲火が浴びせられているのです。

だがしかし、凡百の右翼日和見主義者と異なり、われわれは、その中で次のことをはつきりと見ぬいて闘つていかなければなりません。すなわち、七七年日本階級闘争が、明確に密集し

ち破らねばなりません。着実に国際主義の総路線のもとに、革命党建設を全精力あげて闘いとらなければなりません。圧倒的なカンバの集中を心から要請します。

共産主義者同盟（全国委員会）

1977年12月15日

烽 火

10.8—9

A I F 総力戦で血路切りひらく

三里塚闘争勝利へ

我々は、十・八羽田闘争十周年、現下の日帝の全体重をかけた開港攻撃と総対決し、蜂起一プロ独の大道へ突き進め」である。五・六岩山大鉄塔破壊一反革命非合法攻撃に示される、敵一日帝国家権力のその延命にかける凄じいばかりの強権的な攻撃の本質を見ないならば、暴力支配の今日的形態たる中間連合政府攻撃の補完物へと一気に転落せざるをえないことは明らかである。

十・八首都において決起した我々は、権力の集会破壊攻撃をものとせず、同志たちの熱い決意表明に集会は終始戦闘的に打ち抜かれた。ギリギリと煮つまる開港阻止決戦への布陣を固める。今秋期、とりわけ、なだれうつ右翼日和見主義が、日帝国家権力への屈従の下に、自らを中間連合政府攻撃の担い手としていくことに對し、我々は一切の妥協を排し、これと真向うから闘い抜くことを宣言した。今こそ、革命党によるプロレタリアの主戦場たる全国政治闘争の領導と、その組織化が問われているのだ。なかでも、国際主義の総路線に導かれた全国政治闘争・革命的政治闘争の組織化をもつて決起するプロ人民を革命的プロヘンス運動をめぐる社帝・右翼日和見主義とのヘゲモニー争いで解消することは必ず中間連合政府攻撃への装いを新たにした屈服の道につながることを宣言したのである。

迫りくる三月開港阻止決戦に向かって、断固として、蜂起一プロ独立された我が総路線を掲げ抜いた闘いとして対決した。何よりも、

集会は、政治警察・機動隊の不当弾圧をはじめとする全国の労働者、学生、反基地住民運動を担う人々等の圧倒的な結集をもって勝利的意義をのべる千葉労働の先進的労働者、全国から寄せられる激電、そして「生死をかけて闘う」と、次々に立つ反対同盟農民。北原事務局長は基調提起において、「鉄塔跡地では今、ヤグラの砲化をすす

もはや、日帝には死に向つての当弾圧をはじめとする全国の労働者、学生、反基地住民運動を担う人々等の圧倒的な結集をもって勝利的意義をのべる千葉労働の先進的労働者、全国から寄せられる激電、そして「生死をかけて闘う」と、次々に立つ反対同盟農民。北原事務局長は基調提起において、「鉄塔跡地では今、ヤグラの砲化をすす

上告棄却彈劾・石川氏即時奪還

10.31

狹山決戦に三万首

首都明治公園において、三万人のプロレタリア人民を結集して闘い取られた。

我が反帝戦線（全国委）は、五六三里塚反革命非合法攻撃、八九上告葉却攻撃にしめされる日本的新たな攻撃との真向からの対峙を形成する、全国政治闘争とし、帝の新たな攻撃との真向からの対峙を形成する、全国政治闘争として闘い抜いた。

おこる、「同和行政」打ち切り攻撃や差別「地名総鑑」をはじめとした部落差別攻撃の強化に対する部落大衆の憤激と闘いのエネルギーを、個別改良闘争へと封殺してゆくのである。あるいは、これと並んで調をあわせて「福田自民党内閣との対決」として、闘いの階級性を一切清算し反政府運動一般へと委曲せんとするのである。

真向から対決せよ！」「日帝は最後の延命をかけて朝鮮侵略革命の強化、中間連合政府攻撃かけてきている！その攻撃のイニエに無実の石川氏の生命までも奪いさらんとしている！」「鮮侵略反革命を内戦へ転化せよ革命的プロの国際主義的任務の革命的部落大衆とともに石川氏生きて奪還せよ！」

り、他における見せかけの共和機構をもつてする中間連合政府の平和幻想の下に、革命的プロ人民をなにがなんでも引き入れ、屈服させ、朝鮮侵略反革命（戦争）遂行体制の構築を着々と目論んでいる。この攻撃のイケニエに無実の石川氏が供されんとしていることを、我々は一瞬たりともアイマイにしてはならない。

十三、二闘争は文字通り、部落解放闘争を、中間連合政府攻撃の下排外主義—融和主義へと導くのか、それとも、武装蜂起—プロ独立の大道で革命的プロ人民の国際主義的政治的任務の下に領導し、勝利の道をさし示すのかをめぐる、一大階級攻防戦として闘い抜かれ、我々はかかる輩を断固けちらし八・九攻撃にかけた日帝の階級的にアピールする「七十四年、十一・三一寺尾判決をゆるすな／排外主義—融和主義と闘い抜け／狹山差別裁判糾弾闘争の基礎もろとも破壊しつくさんとする八・九攻撃に

集会は西岡氏からの基調提起はじまり、「寺尾判決、そして告棄却攻撃を絶対に打ち碎かねならない。」石川氏を生きて奪返す」の集会宣言を最後に確認戦闘的デモンストレーションを開した。

だからこそ、同志諸君！
中間連合政府攻撃に屈服する排
外主義一融和主義を粉碎し、「朝
鮮侵略反革命を内戦へ！」を高々
とかかげ「武装蜂起一プロ独」の
大道を、部落解放闘争の路線的發
展を戦取すべく、石川氏を先頭と
した革命的部落大衆とともに、断
固進撃しようではないか！

融和主義者ども、そして隊列内部にひそむ右翼日和見主義者どもは、日帝の八・九攻撃を頂点としたすさまじいまでの部落差別攻撃の強化に対し、中間連合政府攻撃の下への屈服一合流を呼びかけた。彼らは「反動裁判官をいれ替えるよりましな政府の樹立」を唱え、八・九攻撃以降、より戦闘的にまき

十一・二〇、千葉本町公園にお

いて、動労千葉地本主催、三里

「敵はすべての条件が整つたよ

11.20
開港策動粉碎・ジエツト燃料貨車輸送阻止
反対同盟・
千葉動労先頭に闘う

|0.3| 首都・明治公園に三万の大結集

は、動労一青年部を先頭に、七千名に及ばんとする結集を闘いとり、第二期工区とならぶ一大攻防環たる、ジエット燃料貨車輸送阻止闘争の強固な陣型を構築し、三里塚闘争の新たな一步を刻印するものとして存在したのである。

結集しているのだ。」として、この共闘の前進を動労千葉と共に引きひらくことを表明し、三里塚開港阻止決戦の本格的な段階の中にあっての闘いの中心軸を提起した。

各住民団体の決意表明と、動労青年部よりの基調報告を終え、まもなく突入せんとする一大順法闘争の重要な拠点となる動労千葉各支部・支部長からの決意あふれる、



れ
た

あいさつで集会はしめくくられたのである。

この十一・二〇開港を突破口に、のことはとりわけ重要な任務であり、来春三・三〇開港を宣言した三里塚農民と先進的労働者との本

格的な共闘の足場は固められた。この地平こそ、三里塚闘争がその出発の当初か

のことはとりわけ重要な任務であり、来春三・三〇開港を宣言した日帝一空港公團との対決の中で更に前進させられねばならない。そして、この巨大な自然発生的

「ベトナムの飛行機を
とばすな！」として書きあ
げてきた鬪いの、そして「開
港絶対阻止！」のスローガ
ンをかかげた今に至る鬪い
の、その発展の姿として、
我々は鮮明にしておかねば

のことばはとりわけ重要な任務であり、来春三・三〇開港を宣言した日帝一空港公団との対決の中でも前に前進させられねばならない。

そして、この巨大な自然発生的高揚を固定化し、おしとどめ、また、この鬨いの後からついていくことや、あるいは、一転して戦術的突出のみを呼びかける右翼日和見主義・急進民主主義共が、結局は、この鬨いを中間連合政府の下へと収約せしめんとする日帝への

12.2

10
•
31

関東集会かちとる

姬百合— 白銀鬪爭

争をその最先頭で闘い抜いた四戦士に対して、控訴棄却、一審判決支持の判決を打ちおろした。この反革命報復判決が門馬の手によつて打ちおろされたその瞬間から、反撃の闘いは本土一沖縄をつなぐいて七・一七、四戦士を先頭に全國をかけめぐり果敢に闘い抜かれている。

このような反撃の闘いの一大高潮の中で、首都における十・三二判決弾劾集会が、関東沖解同、関東支持する会主催の下、圧倒的に勝ちとられた。

集会は、定刻六時、司会の開会宣言をもつて始まった。

まず、「姫百合一白銀高裁判決に対する抗議声明」が読みあげられる。「断じて、十・三一判決を許すことなく、七・一七闘争の成果を受けつぎ、新たなる一步を踏みだす」という決意を、全体が我

・内田・岩沢・郡司四氏の「狹山市闘争、三里塚闘争等々と闘うものの抹殺攻撃がかけられているがそれに屈することなく闘い抜こう」という力強いアピールに「異議なし」の声が会場全体からまきおこる。そして、関西支持する会からの「今まで以上の反撃の闘いを本日の集会を受けつけ、十二・一八関西集会を突破口に闘い抜く」と熱烈たるアピールが読みあげられた。

百合・白
銀闘争の
永続的・
革命的發
展を勝ち
とれ。三、
沖繩解放
闘争の勝
利に向け
た沖繩—
「本土」
を貫く単
一の沖解
同建設の
現現在的
義」と三
点にわた
つて提起
された。
そして
集会に結
る諸団体

の発言をうけ、最後に反帝戦線（全国委）の同志が簡潔にしかし
決意をみなぎらせ「①天皇制（イ
デ）攻撃を先兵とした沖縄人民の
侵略反革命への動員と対決した七
・一七闘争に対する十・三一反革
命報復判決粉碎に向けた沖縄一
「本土」を貫く総反撃を組織し、
②朝鮮・アジア人民の民族解放一
社会主義勢力と連帶し、朝鮮侵略
反革命戦争阻止、基地全面撤去の
沖繩解放闘争を戦取すること、③
社帝を先頭とする武装反革命一右
翼日和見主義、それへの追随者を

A black and white photograph capturing a massive outdoor gathering. The foreground is filled with the heads and shoulders of a dense crowd of people, all facing towards the right side of the frame. In the background, a long, low building or stage structure is visible, its roof adorned with numerous small flags or banners. The scene suggests a public event, a protest, or a large-scale community meeting.

11.20 決戦体制うぢかためる

そして今こそ、この自然成長的な結合を今一步前進させ、先進的農民をへ武装蜂起一プロ独の担い手として登場せしめ、同時にその成果を階級的労働運動の創出の事業とむすびつけて発展させることが問われているのである。三里塚闘争が、日本階級闘争の一大攻防戦として多大な影響力と地平をつくりあげた今、こ

輸送阻止の鬭いと固く連帶し、来る春三・三〇へ向け急ピッチで進行する開港攻撃との全面対決へと突き進もう！開港阻止！ジエット燃料貨車料貨車輸送阻止！三里塚闘争勝利へ！

四戦士と共に反撃を組織せよ！（12／2）

関東集会は勝利的に貫徹された。



烽 火

一九六〇年代末から七〇年代初頭、先進帝国主義国をつらぬいた大衆的武装闘争の世界的爆発は、現代過渡期世界を歴史的に区切る一時代における帝国主義足下プロレタリアート人民の不滅の戦闘宣言であった。このたたかいは敗北し、敵はあたかも以前よりも強大になつてわれわれの眼前に立ちふさがるかに見える。しかし革命的プロレタリアートにとってはつきりしていることが二つある。ひとたび燃えあがった烽火、帝国主義本国のプロレタリアートの暴力革命の戦闘宣言は、わが国においても、西ヨーロッパにおいてもますます根強く、ますます強固なる成長を準備していること。ふたつめに、この烽火をあげるべきでなかつたといい、この闘争宣言をブルジョアジーに発すべきではなかつたと考える右翼日和見主義と断固として闘うことがそである。そしてこの二つは、一枚のメダルの表裏をなしている。かつてのそして必ず次より大規模な根底的な決起にひきつがれる世界的な「大衆的武装闘争」の一旦の敗北はただ客観的情勢に対応しうるにたる、自然発生的諸決起を勝利に導くにたる「前衛党」こそが未成熟であり、不十分であつたと総括されるとき、はじめてこの二つの革命的プロレタリアートの確信は彼らの前進の糧に転化されるのである。

階級闘争の、とりわけ先鋭な、大衆的な国際的な経験はまだ党にのみ蓄積され、さらなるプロレタリアートの党建設の教訓へと高められる。

ブルジョアジーは、ただ世界的なレーニン主義党的未成熟ゆえに回避した存亡の危機を事前に予防するための反革命諸施策を講じ

右翼日和見主義の列寧主義蜂起戦術（路線）を堅持せよ

第一章 鉄の列寧主義前衛党の戦術

（上）

1 戰術を規定する われわれの政治的立場

一九六〇年代末から七〇年代初頭、先進帝国主義国をつらぬいた大衆的武装闘争の世界的爆発は、現代過渡期世界を歴史的に区切る一時代における帝国主義足下プロレタリアート人民の不滅の戦闘宣言であった。このたたかいは敗北し、敵はあたかも以前よりも強大になつてわれわれの眼前に立ちふさがるかに見える。しかし革命的プロレタリアートにとってはつきりしていることが二つある。ひとたび燃えあがった烽火、帝国主義本国のプロレタリアートの暴力革命の戦闘宣言は、わが国においても、西ヨーロッパにおいてもますます根強く、ますます強固なる成長を準備していること。ふたつめに、この烽火をあげるべきでなかつたといい、この闘争宣言をブルジョアジーに発すべきではなかつたと考える右翼日和見主義と断固として闘うことがそである。そしてこの二つは、一枚のメダルの表裏をなしている。かつてのそして必ず次より大規模な根底的な決起にひきつがれる世界的な「大衆的武装闘争」の一旦の敗北はただ客観的情勢に対応しうるにたる、自然発生的諸決起を勝利に導くにたる「前衛党」こそが未成熟であり、不十分であつたと総括されるとき、はじめてこの二つの革命的プロレタリアートの確信は彼らの前進の糧に転化されるのである。

階級闘争の、とりわけ先鋭な、大衆的な国際的な経験はまだ党にのみ蓄積され、さらなるプロレタリアートの党建設の教訓へと高められる。

ブルジョアジーは、ただ世界的なレーニン主義党的未成熟ゆえに回避した存亡の危機を事前に予防するための反革命諸施策を講じ

ることにやつてある。ヤルタリジュネーブ体制崩壊後の帝国主義間強盗的抗争の不可逆的激化はこれに一層拍車をかける。帝国主義は国内反革命治安体制、むき出しの革命的プロレタリアートその党への組織破壊攻撃と戦闘的個別戦線への暴力的弾圧をつづめ、他方、プロレタリアート上層部の買収、帝国主義的労働運動の育成をもつて排外主義・社会排外主義の育成をおしすすめる。この二つの方策は、資本主義の最高の段階としての帝国主義、社会主義革命の前夜としての帝国主義の、侵略反革命戦争のための国内統治の車の両輪である。アジア・朝鮮侵略反革命戦争をもつて日本資本主義の危機をのりきらうとする日本帝国主義の反革命武装こそ、ブルジョア階級と直接に結合した侵略反革命暴力として組織された警察・軍隊・官僚機構と天皇制・天皇制イデオロギーである。日本プロレタリアートは、日本帝国主義の侵略反革命をうちやぶらねばならない。日本プロレタリアートは、ブルジョア独裁支配機構を正面から打倒しなければならない。日本プロレタリアートはこの闘いの前に立ちふさがる社会帝国主義・右翼日和見主義を打倒し、彼らの支配と影響からプロレタリアート人民をひきはなし、革命党のもとに組織しなければならない。ここで課題にしようとする「われわれの戦術」はまずもってこの政治的方向において規定されねばならない。

われわれの戦術上の武装は、このような政治的目的をわれわれの党の首尾一貫した戦術をもつて勝利させることにある。局面に動搖し浮動する小ブルジョアジーの右や左の「戦術」でないわれわれの戦術は、プロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独裁への帰結に確固として目標づけられねばならない。したがつて、現実のプロレタリア階級の状況、階級闘争の成熟の現実を同時に、厳然とふまえねばならない。武装蜂起の成就、プロレタリア独裁の樹立とそれ以前の階級闘争の成熟

の現実的状況との間には、たとえ蜂起の前夜といえども巨大な「へだたり」があることは歴史の教えるところである。すなわち、階級的激昂と決起の大高揚（反面それはブルジョアジーの動搖と分裂の深化である）がいかに現実のものとなるとも、それが自然成長性にまかせられる時、やがては分断と個別破壊とそれによる目的意識的なプロレタリアートの領導こそが首尾一貫したプロレタリアートの戦術としての組織、すなわち党の建設とそれを教える。ここにプロレタリアートの唯一の武器としての組織、すなわち党の建設とそれが鮮明にされるのである。われわれはそれを列寧主義武装蜂起戦術と呼ぶ。ところで、現実のプロレタリアート人民の圧倒的大多数は、日本における武装蜂起の道を実際に歩んでいるわけではない。彼らは帝國主義の暴力支配の今日的形態であり、また危機の時代の最後の平和幻想たる「中間連合政府構想」にすっかり幻惑されてしまっている。ブルジョアジーという支配階級への自然発生的反抗や憤怒は、現政権の交代、「よりましの政府」への願望にすりかえられているかのようである。そして、これに社共が「資本主義の救済と改良」の路線をもつて全面的に加担、協力している。そして革命派はいまだ圧倒的に少数である。

しかし同時に次のこともまた明らかである。すなわち、中間連合政府が現に出現したこそ、その幻滅の破産の一挙的開始となるであろうこと。人民は一挙的に幻滅から目ざめ、二度と中間連合政府によって自己の利益が実現されるなど信じないだろうこと。なぜなら中間連合政府そのものは、色あいを変えた目新しく装ったブルジョア独裁国家の一形態たるブルジョア共和制の変種以外の何ものでもなく、そこでは改良の速度以上に、経済的政治的な資本主義の擁護の必要性が増大するからである。ブルジョアジーはもはやいかな

る形態の「共和制」をもつてもプロレタリアート人民を支配しつづけることは不可能になる。中間連合政府の破産の時は、ブルジョアジーが自己をファシズムとして組織し、ファシズムをもつて人民を支配するための歴史的条件が最大限に成熟する時もある。時は来た。われわれはこれに計画され準備されたプロレタリアートの全国一斉武装蜂起の発令でこたえよう。そのためにこそ、党とプロレタリアートの武装蜂起—プロ独の全面的な準備が勝利的に組織されていなければならぬのだ。

この今日的要請とむすびついてのみレーニン主義武装蜂起戦術は、真に革命的プロレタリアートの戦術たりうるのである。われわれはこのような政治的立場に立って、第一章において主要にレーニン主義武装蜂起戦術が、マルクス主義戦術思想(暴力革命)の帝国主義段階における党的戦術としての発展であること、したがつてそれはわれわれ現代過渡期世界共産主義者によって創造的に継承されるべき唯一の正しい党的戦術原則であることを明らかにすること、第二章においてこれを徹底的に右翼日和見主義者の戦術原則上の動搖と分岐せしめることによつて、革命的プロレタリアートの今日的戦闘指針たるべく武装することを目的とするものである。

2 マルクス主義 暴力革命論の発展と 戰術思想について

「共産主義者は、これまでの一切の社会秩序を暴力的に、転覆することによつてのみ、自己の目的が達成されることを公然と宣言する。支配階級をして、共産主義革命の前に戦慄せしめよ。プロレタリアは、革命において、鉄鎖のほか失うべき何ものも持たない。彼らは世界を獲得しなければならない。万国のプロレタリア団結せよ！」

一八四八年に掲げられたこの一節の烽火は、歴史を階級闘争の発展する歴史として説き明かすと共に、我々の生きる時代を、プロレタリアートによるブルジョアジーの打倒、共産主義革命の長大な一時代であることを高らかに宣言した。以降、幾多の革命の実践を経ることによつて、この炎はさらに武装された。同時にブルジョアジーとそれに解体された者たちによるこの炎への敵対と歪曲もまた危機の煮つまりの中で加速されている。ブルジョアジーの中のいくらか「自由主義的」な連中は、階級闘争の存在は承認する。ただ彼らは、一人の力、すなわち国家の合法によつて決着づけることに反対し、ブルジョアジーグス主義革命論の中から革命を唯一実現する

方法—暴力革命を、忘れさり、あるいは、これを実践の問題から「思想」の問題へとしりぞける右翼日和見主義に補完されて、マルクス主義をブルジョアジーにとつて無害な「宗教」へと解体しようとしている。

共産党宣言は、当面するプロレタリアートの共産主義革命の根本的性格を宣言したのであって、革命の歴史的経験によって克服されべき不充分さをもつとはいえ、「これまでの一切の社会的秩序を暴力的に転覆することによってのみ」プロレタリアートの目的が達せられることを主張した。この暴力革命の宣言はマルクス・エンゲルスの国家論によつて理論的基礎が与えられ、フランス革命の経験によつて、プロレタリアートの武装蜂起という実践的指針を与えられた。

國家の歴史的役割とその意義についてのマルクス・エンゲルスの基本理論によれば、國家とは、あい争う経済的利害をもつ、諸階級の発生にともなう社会的産物であり、階級対立を秩序の枠内に保つべき権力—社会から生まれながら、ますます外的なものになつていく権力である。それは機能的には、階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり、この抑圧を法律化し、秩序化するものである。それは通常最も勢力のある経済的に支配する階級であり、被抑圧階級を抑圧し、搾取する新しい手段を獲得するのである。マルクス・エンゲルスは、この科学的分析を、この権力の物質化を組織と軍隊と監獄に代表される階級支配のための暴力装置として余すことなく暴露しているとともに、マルクス主義の当初において、かかげられた「暴力革命の不可避性の宣言」を「階級対立の非和解性、その產物としての国家—ますます社会に対しても外的なものとなつていく権力」であるとの結論の上に暴力革命なしには、プロレタリアートの解放は不可能であるという宣言に発展させこれを鮮明にしたのである。

さらにプロレタリアートの解放のための暴力革命に関するマルクス・エンゲルスの見地は、プロレタリアートの革命的独裁と切り離しえないものとしてある。「資本主義社会と共産主義社会の間には、前者の後者への革命的変革の過程が横たわる。それには、また政治上の過渡期が対応するが、この時期の国家は、

ロレタリアートはプロレタリアートとしての自分自身を廃絶し、そうすることであらゆる階級差別と階級対立を廃絶し、そうすることぞける右翼日和見主義に補完されて、マルクス主義をブルジョアジーにとつて無害な「宗教」へと解体しようとしている。

ア国家は廃絶する以外に決して、おとなしく死滅するものではないというプロレタリアートの暴力革命の継続としての主張がある。マルクス主義によれば、プロレタリアートとは、決して現代カウツキー主義者が夢みるような「バラ色の最小限綱領」が主軸でもない。ア国家権力機構の破壊がまず主軸である。そして、これはプロレタリアートの組織された革命的暴力なくして決してなされえないプロレタリア独裁は、プロレタリアートによるブルジョアジーへの抑圧と支配、ブルジョア国家権力機構の破壊がまず主軸である。

そして、これはプロレタリアートの組織された革命的暴力なくして決してなされえないプロレタリア独裁は、プロレタリアートによるブルジョアジーへの抑圧と支配、ブルジョア国家権力機構の破壊がまず主軸である。そこで、こうすることによつて、この闘争の只中から、プロレタリアートは破壊されたものに替えるべき社会の生産と、分配の仕組みと組織を創出するのである。プロ独国家の死滅、すなわち共産主義の実現に至るまでのこの歴史的な過程がプロレタリア独裁であり、それは最も目的意識的なブルジョアジーに対するプロレタリアートの暴力革命の過程なのである。

以上、簡単に見たようにマルクス主義の戦術思想は鮮明に、最も徹底した暴力革命である。それは、日和見主義者がいやいやながら頭で認める「階級闘争の非和解性からのみ理解される暴力革命の不可避性」では決定的に不充分なのであり、暴力革命こそ、ブルジョア国家の廃絶とプロレタリア独裁の根本的内容である。そして、同時に、この点において、マルクス主義戦術は、その創設期からブランキズムの「絶望の戦術」ではなく、プロレタリアートの勝利の戦術たり得るのである。

3 マルクス主義 蜂起とレーニン 武装蜂起路線

空想的社会主義との闘争の中で確立されたマルクス主義の暴力革命の理論は「一八四八年(五一年)の大革命の実践の経験を通じて、プロレタリアートの蜂起をその戦術の基礎として確立した。一八五二年エンゲルスは、その著「ドイツにおける革命と反革命」の中で次のように述べている。「蜂起」というものは、戦争その他と全く同様に一つの技術であつてある一定の運動法則に支配されているものである。そして、それらの法則はもし、これを無視するならば、無視した党的破滅をもたら

ゲルスは言う「プロレタリアートは國家権力を掌握し、生産手段をまづはじめには、国有財産に転化させる。だが、そうすることできることによって、この炎はさらに武装された。」

(11) 1977年12月15日

烽火

4

暴力革命論と

武装蜂起

レーニンがその党建設において果したこの点についてのマルクス主義の発展は、計画としての蜂起を中央集権非合法党による領導と、プロレタリアートの計画的武装と結合させ、首尾一貫した革命的プロレタリアート、党的戦術へと発展させ、これを革命的プロレタリアートの党の路線へと高め上げたことにある。ロシアボルシェビキ党の武装蜂起の路線は主要に帝国主義論と国家論において、理論的に基礎づけられた。そして、この二つを貫くものはカウツキー主義は、現代こうすることによってレーニン主義は、現代世界帝国主義下プロレタリアートの原則的戦術を解明したのである。

第二に、蜂起は自然発生的な圧倒的な被压抑階級の決起の高揚の物質化である。この点において蜂起は、あらゆる経済主義者の言葉の遊びを日和見主義の泥沼に残し、自然發生性に対する目的意識性である。

第三に、蜂起は階級闘争の自然發生性の最高の組織形態である。マルクス主義の蜂起は、この点においてプロレタリア革命の戦術基礎としての特別の指針たりうるのである。プロレタリアートの計画としての蜂起、これがボルシェビキ党とロシア革命へ引き継がれたマルクス・エンゲルスの戦術である。

レーニンがその党建設において果したこの点についてのマルクス主義の発展は、計画としての蜂起を中央集権非合法党による領導と、プロレタリアートの計画的武装と結合させ、首尾一貫した革命的プロレタリアート、党的戦術へと発展させ、これを革命的プロレタリアートの党の路線へと高め上げたことにある。ロシアボルシェビキ党の武装蜂起の路線は主要に帝国主義論と国家論において、理論的に基礎づけられた。そして、この二つを貫くものはカウツキー主義は、現代こうすることによってレーニン主義は、現代世界帝国主義下プロレタリアートの原則的戦術を解明したのである。

すであろう……」と。後にレーニンによって発展させられるマルクス主義者の蜂起は、すでにエンゲルスによって、そのプロレタリア革命の戦術基礎としての根本的基本軸が明らかにされている。エンゲルスはここでブランキズム批判にことよせて直面する労働者の武装蜂起が、逃亡する者を激しく批判し、武装闘争は勝利するためには計画され、組織され、領導されねばならないことを「技術である」との一言で、はつきりと打ち出している。その点では、マルクス主義は、ブランキーから学ぶことにいさかも躊躇しなかった。しかし同時に他の点でマルクス主義の蜂起はブランキーの陰謀戦術とははつきり異なる。エンゲルスは先の引用の直後にプロレタリアートに敵が正規軍であることを指摘し、正規軍に勝利するに足る「非常にまさった点」がない限り、蜂起をしかけてはならないことを警告している。だが、ブランキーによれば、正規軍に勝利する条件は陰謀の技術の高さであり、彼は客観的条件の成熟とプロレタリアートの主体的成長を武装蜂起に結合させることをもつて勝利することを知らなかつた。蜂起、それは武装闘争一般と次の点で異なる。それは計画され、組織され、領導された武装闘争の開始、あるいは勝利への転換点である。この点において蜂起は、あらゆる経済主義者の言葉の遊びを日和見主義の泥沼に残し、自然發生性に対する目的意識性である。

我々はまずここでレーニン党の戦術を概括する。そして第二章で我々の党建設のための闘いの場を通して、さらに詳しく検討し、その断固たる継承と発展の方向を検討しよう。

あらゆる日和見主義者は、カウツキー主義によつてレーニン主義に敵対するか、あるいは、レーニン主義の総体ではなく、その一部を領導し、これを勝利させることにあることを否定する。彼らは、階級闘争の自然發生性をプロレタリアートの「革命の戦術」におきかえる。彼らは、階級闘争の自然發生性をもつて、「革命的プロレタリアート—共産主義者」の「戦術」のすべてにおきかえる。こもうすることによって彼ら、右翼日和見主義者は、プロレタリアートの「自然成長」そのものの足を引っぱって、社会帝国主義者の陣営へとひきづり込む。

一方、右翼日和見主義との闘いの熱意に燃え、レーニン主義の復権を願望しながら、「内戦・内乱」の形態的準備へと空転することにレーニン主義戦術を切りちぢめる左の日和見主義者がいる。彼らのうちの最もマルクス主義に近い諸君でさえ、次の点でレーニン主義から逸脱と、レーニン以降の国際共産主義運動に学ぶことを忘れていた。彼らは、帝国主義もまた資本主義であること、帝国主義の侵略反革命は、国内プロレタリアートのブルジョアジーの専制支配と切り離しえないのであり、これを統一的に把えるには、ブルジョア国家権力の破壊をプロレタリアートの前面におし出すべきことを知らなさすぎる。

彼らの急進民主主義的反スターリニズム運動をもつて、止揚・発展させるのではなく、帝国主義の政策的結果への反対戦術をもつて放置することになる。この点について、我々は中核派の根底的誤りが、その反スターリニズムにあり世界革命と世界党建設なくして、日本プロレタリアートの勝利のありえないことを知らず、その結果、民族解放roneの建設と社会帝国主義の打倒を結合して、とらえられることを否定して、現下のプロレタリアートの世界党建設のための今日的任務を、現実的政治闘争をもつて、止揚・発展させるのである。したがつて、彼らの一般戦術は、プロレタリアートの個々の階級闘争の個別性を全般の前面におし出すべきことを知らない。

ではなく、帝国主義の政策的結果への反対戦術をもつて放置することになる。この点について、我々は中核派の根底的誤りが、その反スターリニズムにあり世界革命と世界党建設なくして、日本プロレタリアートの勝利のありえないことを知らず、その結果、民族解放roneの建設と社会帝国主義の打倒を結合して、とらえられることを否定して、現下のプロレタリアートの世界党建設のための今日的任務を、現実的政治闘争をもつて、止揚・発展させるのである。したがつて、彼らの一般戦術は、プロレタリアートの個々の階級闘争の個別性を全般の前面におし出すべきことを知らない。

先にも述べたように、マルクス・エンゲルスの時代には、内戦・内乱あるいは蜂起は、暴力革命の不可避性、およびプロレタリアートの計画された暴力という基礎的域を出なかつた。しかしロシア革命に引き継がれるそれ以後の革命の経験と、ロシアボルシェビキ党によるマルクス主義の発展は、これらの関連と区別を党による武装蜂起と、プロ独の目的意識的領導という任務において明らかにした。これによつて武装蜂起は、プロレタリアートの路線へと高められたのである。レーニンは帝国主義が帝国主義戦争を不可避免にすること、帝国主義戦争に対する帝国主義本国プロレタリアートのとるべき道を、戦争阻止のためのプロレタリアート人民の蜂起、すなわち自國政府の敗北を強要し、これを内戦へ転化させるための蜂起として明らかにした。このことを党と革命的プロレタリアートの厳しい、具体的なプロレタリアートのストーラーが、やくくな任務としてはじめて、「帝国主義戦争を内戦へ！」というスローガンが一般的でない、具体的なプロレタリアートのストーラーが、とりえたのである。したがつて、帝国主義戦争の時代が内戦の時代であるとの共産主義者のテーマは決して、一般的な状況基盤としての安易な時代認識であつてはならず、武装蜂起を準備しなければならないという具体的な任

